今週の為替相場見通し（2023年12月18日）

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		140.95 ～ 146.58	142.21	137.50 ～ 145.50
ユーロ	（ドル）		1.0742 ～ 1.1009	1.0894	1.0750 ～ 1.1050
（1ユーロ=）	（円）		153.85 ～ 157.61	155.00	152.00 ～ 157.00
英ポンド	（ドル）		1.2501 ～ 1.2793	1.2680	1.2400 ～ 1.2900
（1英ポンド=）	（円）	*	178.36 ～ 184.33	180.25	178.00 ～ 183.00
豪ドル	（ドル）		0.6540 ～ 0.6728	0.6702	0.6630 ～ 0.6780
（1豪ドル=）	（円）	*	94.61 ～ 96.15	95.28	94.50 ～ 96.00

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

金融市場部　為替営業第二チーム　大野 梨紗

（1）今週の予想レンジ：　137.50 ～ 145.50 円

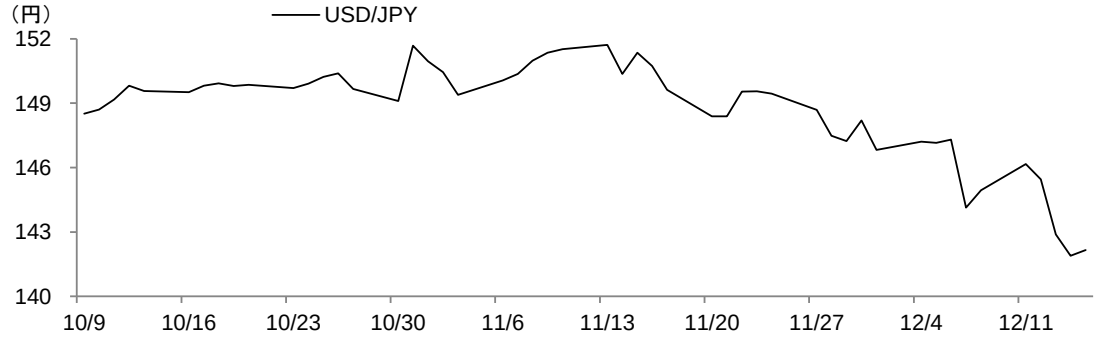
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、ハト派なFOMCの情報発信を受け、一時141円を割り込んだ。週初11日、144.95円 でオープンしたドル/円は、日本株の堅調推移を受け、145円台後半へ上昇。海外時間は、日銀のマイナス金利解除に関し、12月会合での実施を否定する観測報道がなされると、146円台半ばに続伸。12日、ドル/円は米金利低下を背景に145円台前半に下落。海外時間は、米金利上昇を受け145円台半ばで底堅く推移した。13日、ドル/円は145円台後半へじり高。海外時間は、注目されたFOMCにおいて総じてハト派な結果となり、米金利低下につれ143円を割り込んだ。14日、ドル/円は米金利低下を背景に、一時4 か月半ぶりの安値となる140.95円に続落。海外時間は、141円台前半から142円台前半を中心にで底堅く推移。15日、ドル/円は142円台前半を中心としたレンジ推移の後、海外時間に入ると下に往って来い。ウィリアムズNY連銀総裁より利下げ観測けん制発言がなされたことで142円台半ばまで上昇も、米経済指標結果が予想を下振れたことで1円程度反落。その後米金利上昇につれ142.21円でクローズした。

今週のドル/円は下落圧力が強まりやすい展開を予想する。今月7日（木）において植田日銀総裁による「年末から来年にかけて一段とチャレンジングな状況になる」との発言以降、マイナス金利解除の思惑が広がったことや、13日（水）のFOMCにおいてFRBの予想外のハト派姿勢が示されたことを受け、ドル/円は140円台前半を中心とした推移が継続している。かかる中、今週最も注目が集まるのは19日（火）の日銀金融政策決定会合である。10月会合において長期金利の「0.5%程度」を目途とする変動幅を放棄し、新たに上限の目途として「1.0%」を設けるというイールドカーブ・コントロール（YCC）政策の再修正を決定した。今回の会合において、声明文から追加緩和を示唆する文言が削除された場合や、マイナス金利解除など緩和修正の決定に踏み切る場合、あるいは、緩和修正の明確な時期が示された場合にドル/円は下落するリスクが高い。7月14日（金）の直近安値137.25円を下値目途と考えており、140円割れリスクに警戒したい。

（3）先週までの相場の推移

先週（12/11～12/15）の値動き：　安値 140.95 円　高値 146.58 円　終値 142.21 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部　為替営業第一チーム 松木 悠馬

(1)今週の予想レンジ:　1.0750 ～ 1.1050　　152.00 ～ 157.00 円

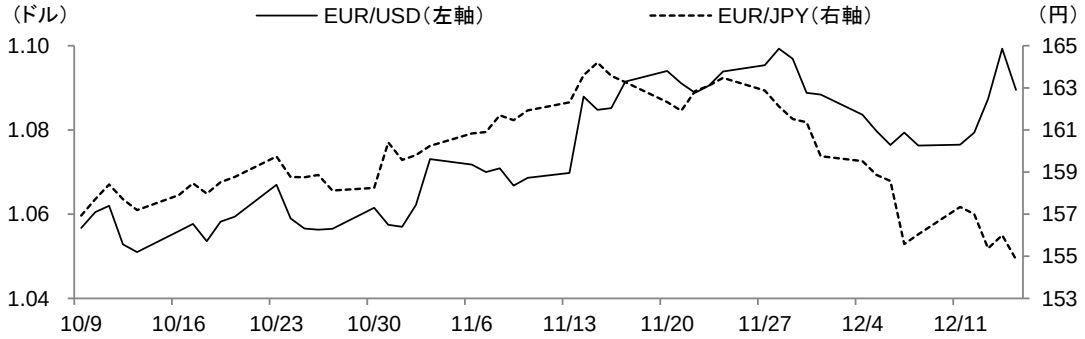
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、米欧中銀会合の対照的な結果を受け、一時1.10台に乗せた。週初11日、1.0766でオープンしたユーロ/ドルは、材料難の中、1.07台半ばから後半でレンジ推移。12日、ユーロ/ドルは独12月 ZEW景気期待指数の強い結果が好感され1.08台に乗せるも、その後は米金利の動向に振らされる展開の中、結局1.08台を割り込んで引けた。13日、ユーロ/ドルはハト派な結果となったFOMCを受けた米金利大幅低下を背景に、一時1.09手前まで上昇した。14日、ユーロ/ドルは、ECB政策理事会において政策金利は据え置いたものの、ラガルドECB総裁 の「利下げは議論せず」との発言や、パンデミック緊急購入プログラム(PEPP)の保有債券縮小計画の公表などを受け、独金利が上昇する流れに合わせ、一時2週間ぶりの高値となる1.1009に上昇した。15日、ユーロ/ドルは、1.09台後半での取引と続いた後、発表された独12月PMIやユーロ圏12月PMIが軒並み市場予想を下回ったことやFED高官のタカ派な発言を受け、ユーロ安となると1.09台を割り込み1.0894で越週した。

今週のユーロは先週示されたECBとFEDのスタンスの違いを背景に底堅く推移すると予想する。ECB会合では政策金利を据え置きつつも、ラガルドECB総裁は「利下げについて全く議論しなかった」と発言したように、現在2024年の利上げを5回以上織り込んでいる市場に対してタカ派な姿勢を示した。他方、FOMC後のパウエルFRB議長は「今日の会合で利下げのタイミングを協議した」と来年の利下げを示唆する発言するなどFEDがハト派にスタンス転換した中、前述したようなECBのタカ派姿勢の維持が意識され、ユーロが対ドルで底堅く推移する展開が基本線だろう。一方で、先週末に発表されたユーロ圏12月PMIの軟調な結果はユーロ圏内の景況感の悪化を示唆。今週は18日(月)に独12月IFO企業景況感指数や20日(水)に独1月Gfk消費者信頼感、ユーロ圏12月消費者信頼感等の指標の発表を控えるが、これらの指標の結果が弱含む場合には、ユーロ圏の景気後退懸念がさらに意識され、ユーロの上値を抑える要因となるだろう。また、今週の日本を除いて先進国の金融政策会合は一巡していることに加え、クリスマス前には休暇に入る市場参加者も多いため、流動性の低下から局所的にボラタイルな展開には注意したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(12/11～12/15)の値動き:　(対ドル) 安値 1.0742　高値 1.1009　終値 1.0894
(対円) 安値 153.85　高値 157.61　終値 155.00



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　中島　將行

(1)今週の予想レンジ:　1.2400　～　1.2900　　178.00　～　183.00　円

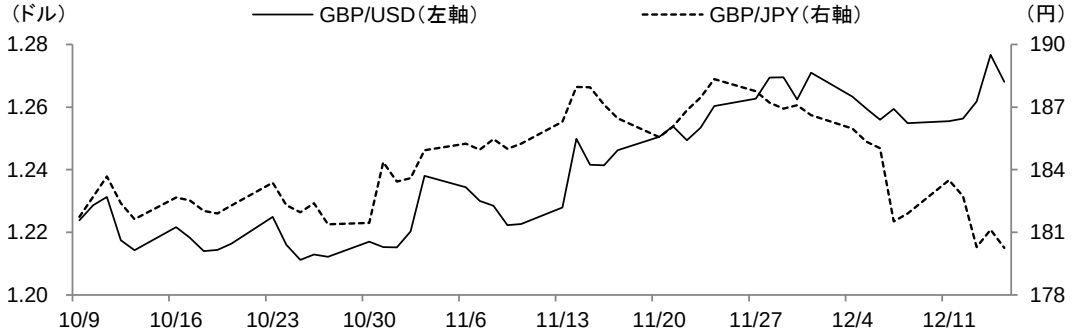
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間のポンド相場は、対ドルで大幅反発。12月13日の米国連邦準備制度理事会(FOMC)はパウエルFRB議長が記者会見で「今会合では利下げのタイミングを協議した」と述べるなど、ハト派転換を強く印象づける内容となり、グローバルにドルが下落した。翌14日のイングランド銀行(BOE)の金融政策決定会合では、政策金利が15年ぶりの高水準である5.25%で据え置かれたほか、前回11月の会合と同様に3人が利上げを主張(6人は据え置きを主張)、インフレ抑制のためには「十分に景気抑制的な金利が十分な期間」必要とのガイダンスが維持された。来年に利下げがあると示唆したFOMCとは対照的な内容であり、ポンドは上げ幅を拡大している。対ユーロでは、ポンドは週前半に下落した後、週後半に持ち直している。BOEと欧州中央銀行(ECB)の金融政策決定会合が同日に行われたこともあり、両中銀の金融政策のスタンスの違いに注目が集まった。ECBのラガルド総裁は記者会見の中で「利下げについては全く議論しなかった」と述べるなどインフレ警戒的なスタンスを維持、その後しばらくしてECBの政策委員らは金融市場が現在見込んでいるよりも利下げは後になるだろうという見方でほぼ一致している、という関係者発言が伝わったことがユーロのサポート材料となった。BOEとECBのタカ派度合いに目立った違いは無かったと見られるが、それでも金融政策決定会合当日までユーロ買いがやや優勢だったのは、先週に指摘したように、中銀のタカ派メッセージによって利下げ期待が後退する余地はECBのほうが大きい、という市場の見方が背景にあっただろう。もっとも、翌15日に発表されたユーロ圏及び主要国の12月分のPMIが軒並み弱めの結果だったこともあり、ユーロは下落。対する英国の12月分PMIはサービス業が52.7と11月の50.9から大幅に改善しており、ポンドはユーロに対し急速に持ち直している。

今週1週間のポンド相場は対ドルで小幅に反落を見込む。13日のFOMCは衝撃的とも言えるほどのハト派転換となったが、それでも2024年の1年間で約6回もの利下げ(毎回▲25bpの利下げが行われると仮定して)が織り込まれた現在の状況はさすがに行き過ぎであろう。実際に、15日にはニューヨーク連銀のウィリアムズ総裁が、来年3月の利下げについて話すのは「時期尚早」として市場の利下げ織り込みの拡大を諫める発言を行っている。また、英国の経済指標では、12月20日(水)に11月分CPIの公表を控えており、インフレ圧力の後退が市場で意識される公算が大きい。12月12日公表の週平均賃金は8～10月の3か月平均の前年比で7.2%の増加と、7～9月分の8.0%から大幅に伸びが減速している。賃金の伸び減速がサービス価格の伸び減速につながるかが注目される。対ユーロでは12月18日(月)の独12月IFO企業景況感指数は意識する必要があろう。対円では、12月19日(火)の日本銀行の金融政策決定会合が最大の焦点となる。

(3)先週までの相場の推移

先週(12/11～12/15)の値動き:　(対ドル)　安値　1.2501　高値　1.2793　終値　1.2680
(対円)　安値　178.36　高値　184.33　終値　180.25



(資料)ブルームバーグ

4．豪ドル

アジア・オセアニア資金部　シドニー室　安藤　愛

(1)今週の予想レンジ:　0.6630　～ 0.6780　　94.50　～　96.00　円

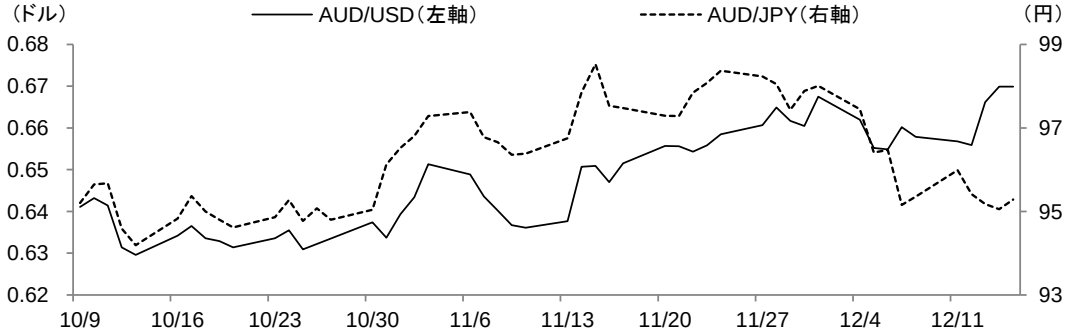
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.65台半ばから0.67台近辺まで上昇。11日、0.6580近辺で取引開始後、小安く推移。週末に発表された中国11月CPIが過去3年で最高の落ち込みを記録し、同PPIも下落幅が拡大したことで、人民元が3週間ぶり安値まで下落。豪ドルも連れ安となり0.6550近辺まで下落したが、豪10年国債利回りが4%を超える中で下値を支えられて0.6570近辺で引け。12日、米11月CPIの発表を控えてドルが売り進まれる中、豪ドルはじりじりと上昇。注目された米11月CPIは前年比ベースでは市場予想と一致したが(+3.1%)、前月比では+0.1%と市場予想(横ばい)に反し上昇した。又、家賃の上昇を背景にコアCPIは前月比で+0.3%上昇(前月は+0.2%上昇)。この発表を受けて米金利は上下大きく振幅後に上昇。豪ドルは一時0.6612を付けたが、米金利が上昇に転じるとすぐに売り戻されて0.6560近辺で引けた。13日、注目されたFOMCでは政策金利の据え置きを全会一致で決定。同時に発表された金利・経済見通しでは、引き締め政策の終了と来年の利下げを示唆したことから、米金利が大幅に低下。債券高(金利低下)・株高・ドル安の反応となり、豪ドルは大きく上昇して0.6660近辺で引けた。14日、豪11月雇用統計では労働参加率の上昇を背景に失業率は3.9%へ上昇したものの、正規雇用者が牽引する形で雇用者数が大きく上振れ(61.5K、予想115K)、雇用環境の底堅さを示す結果となった。統計発表後、豪ドルは買いの反応で一時0.67台に乗せた。その後発表された米11月小売売上高が予想外のプラスとなったことを受けてドル買いの反応となり、豪ドルは0.67割れで引け。15日、中国11月鉱工業生産の伸びが加速し、予想値を上振れたこと等から人民元が買い進まれると、連れ高となり0.6730近辺まで上昇した。その後、ウイリアムズNY連銀総裁が「利下げについて全く協議していない」と発言したことを受けて米金利が大きく上昇すると、豪ドルは0.6660近辺まで下落。引けにかけてドルが売り戻されると豪ドルは0.67近辺まで上昇して越週。

今週の豪ドルは底堅い値動きを予想する。今週は19日(火)RBA議事要旨、BOJ金融政策会合、20日(水)豪11月ウエストパック景気先行指数、21日(木)米7～9月期GDP、22日(金)日11月CPI等の発表が予定されている。前回のRBA会合では声明文が予想されていた程タカ派的ではなかったとと解釈されて豪ドル売りの反応となった。今週発表されるRBA議事要旨では+25bp利上げが議題に上ったか否かなどを含めて、議論の詳細を確認することになる。引き締めサイクル終了のシグナルを出したFEDと対照的に、RBAにタカ派的な材料が出てくれば、豪ドルは一段と上値を追う展開もありうると見る。今週は市場参加者の多くがクリスマス・年末年始休暇に入る前の最後の週となる。徐々に流動性が低下してくることが予想される為、急激な値動きには注意を払いたい。

(3)先週までの相場の推移

先週(12/11～12/15)の値動き:



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。